



堅牢を生み出す千三百度にもなる「窯温度」、陶器というよりむしろ磁器を焼成するに等しい厳しい修羅場。

一口に1300度と言つても陶器の焼成では日本の温度であり、磁器タイルの焼成や板ガラスの製造温度帯に匹敵します。先に紹介したように、この温度は日本でも耐える耐火度の高い陶土は日本で数える程しかありません。ましてや瓦に限ります。用いるのは石州瓦だけです。そんな中、当社は伝統技法に基づき、上りがりは、明らかに堅牢性にこだわります。焼き上がりは、明るかに堅く、緻密な金属音を奏でます。



北海道本願寺派 江刺別院庫裡
北海道檜山郡江差町

明治13年1880年に瓦が葺かれた記録が残る庫裡です。当時の寄進者の札が唯一残るのみですが、推測するに北前舟で蝦夷の地に選ばれた石州瓦です。極寒の地に於いて125年という歳月を凍害塗害に耐え忍びその佇まいを今まで残していました。

建物の傍らには補修用として予備の瓦を在庫していた様子が伺われます。

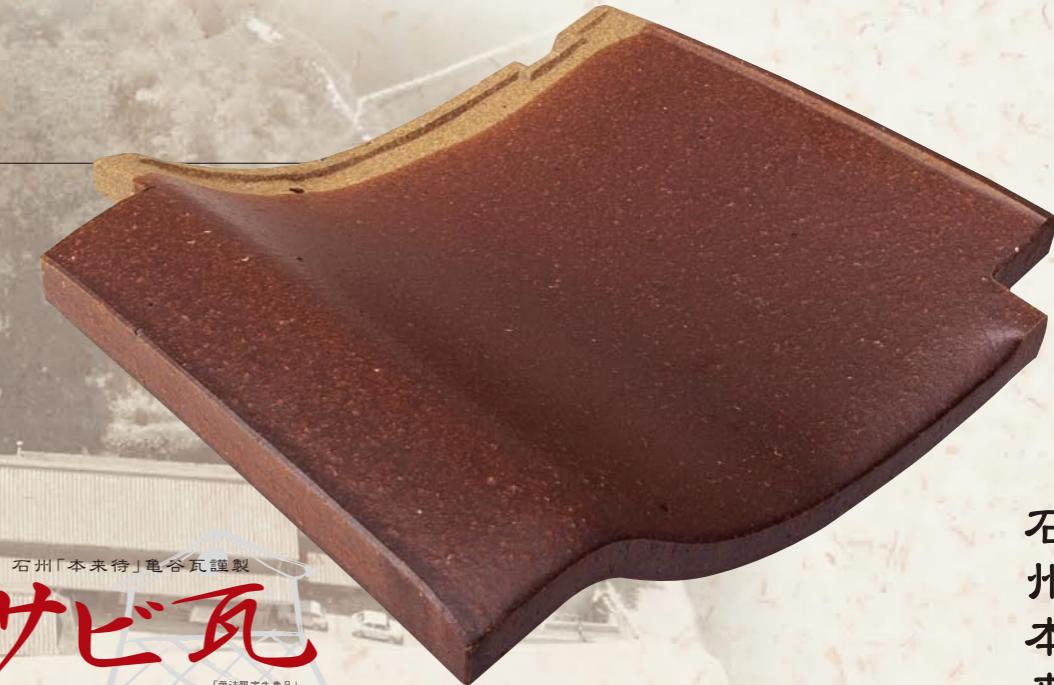


北海道本願寺派 江刺別院本堂
北海道檜山郡江差町

庫裡の葺き替えがご縁で、平成5年に本堂の葺き替えをさせて頂きました。125年間石州瓦が北の地で耐え忍んだ実績は、その後周辺の神社仏閣でも高い評価を頂き、葺き替えのご拝命を数多く頂いております。

「泥」、「窯」、「細工」、
昔から伝わる石州瓦のセオリー。

石州瓦のアイデンティティである赤瓦。その目映い煌めきを放つ赤い色合いは地元島根県、出雲地方より産出される来待石を粉碎し釉薬として活用されています。瓦に硬質な被膜を形成し如何なる気象環境に於いてびくともしない堅牢性は古来より「凍てに強く塙にも強い」として評判を生み北前舟により全国津々浦々へと運ばれていきました。その硬質な被膜である来待石釉のみ融解が進むため、自ずとその高温焼成に耐えうる素地粘土)が必要になったわけです。幸いにして地元石見地方の都野津層土は日本でも耐える耐火度の高さがあり、最後の2時間強は連続して1300度に及ぶ超高温焼成を頑丈に守っています。とりわけ、最後の2時間強は高温焼成に費やし、あくまで堅牢性にこだわります。また、明るかに堅く、緻密な金属音を奏でます。



石州「本来待」亀谷瓦謹製
サビ瓦

【実注限定生産品】

石州本来待瓦「サビ瓦」復活。

守り続けた一子相伝の技。

この度当社では、伝統技法に基づく、石州本来待瓦「サビ瓦」を復活製造いたしました。

石州瓦の始まりは、遡ること元和五年(1619年)伊勢の国、松坂城より浜田藩初代城主、古田大善太夫重治が浜田に入部し築城の折、摂津国(大阪)より瓦師を連れ来たり、瓦を造らせ築城した事に始まります。文化3年(1806年)、浜田藩より瓦株を受け、現在地、亀谷郷に窯場を造り、亀谷瓦工場として今日まで創業二百年瓦製造に勤しんでいます。

仕上がり具合は、淡い赤褐色。ガラス質の被膜を形成する来待石の割が少ない分、光沢が少なく更には素地の荒々しさを一層引き立てる感のある色合いは、錆びを帯びる様来形容して「石州サビ瓦」と称せました。

サビ瓦は、石州瓦黎明期に於いてこの地方では広く作られておりました。通常碎したモノ5割で調合し施釉するところ、亀谷瓦工場として今日まで創業二百年瓦製造を施釉いたします。それを1300度以上という日本一の超高温焼成で焼成します。本製品は水8割に対し来待石2割の釉薬を施釉いたします。それをして1300度以下で焼成します。そこで、その結果、今日残る古い町並みの赤瓦群が、まだ品質的には全く問題はない、一般的なトンネル窯での均一的バラツキのない精巧な焼成ではなく、登り窯あるいは窯内に於いてはこの焼きムラがある程度の加減によつては、等級選別されたります。ただ品質的には全く問題はない、一般的なトンネル窯での製造でしたので窯内に於いてはこの焼きムラが生じ、色味の加減によつては、等級選別されたります。



【S形50枚判】

【和形56枚判】